

編著者：東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会  
発行： 工作舎

アメリカの大学は開拓の途上で芽を吹いたことから、田園の中にまず向学心に燃えた学生が集まり、そこに先生が来て教えたそうで、学生寮は重要な役割をはたしている。日本の学生寮は学外に在ったり、安普請の例が多いが、東京都杉並区にある東京女子大学の寮はアントニン・レーモンドの設計により鉄筋コンクリート造の“日本初の女子個室寮”として建てられた、初代学長新渡戸稲造の教育理念「一日一度は瞑想し、内省し、祈ること」を顕わしたものである。

旧体育館は、「**体育兼社交館**」と呼ばれていたように近代教育に於ける体育の重要性と社交的美徳の教養とを養うことを期待して建てられたそうである。

両建物は 1920 年代に大学初の建物として建設され、関東大震災を無事生き延び、多くの学生に永年愛されてきた。

2006 年夏、大学より「老朽化が進む 2 棟を取り壊して新しい教育・研究棟を建てる」という計画が発表された、この計画に対し卒業生の一部から「建学の精神を具体化し、女子高等教育史、女性史の視点からも記念碑的な建物」として保存活用を訴える「東京女子大学卒業生有志の会（後の「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」）の活動が開始された。

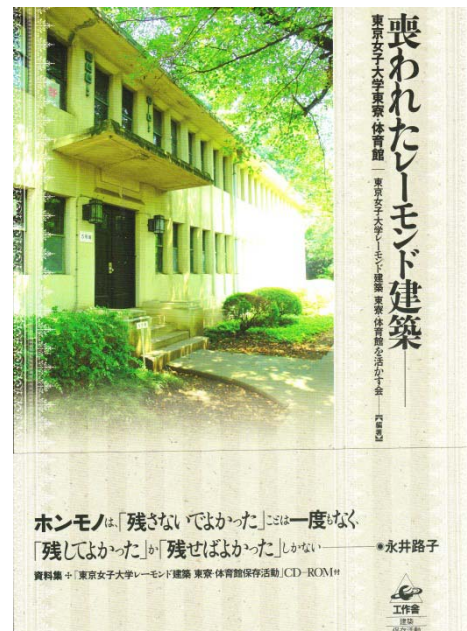
マスコミでの報道直後から卒業生はもちろん、地元住民、建築関係者などからも運動に賛同する署名活動がまき起り、「日本建築学会」「杉並区長」（私学に対し行政の首長が保存要望書を提出するのは極めて稀）はじめ多くの保存要望書の提出があいついだ。

「有志の会」と大学側の話し合いは何度も行われたが、「老朽化による安全性の配慮」「敷地の有効利用」などの観点から、大学側の回答は「再考の余地がない」だった、その都度「有志の会」は専門家による「関東大震災をも乗り越えた強度上の安全性」「二棟を残したキャンパス計画」など保存活用できる方法を何度も提案する一方、卒業生・専門家・市民参加によるシンポジウム、イベントの類を開催し、その回数は 10 回以上にも及んだ。

「有志の会」はシンポジウムの報告書を冊子にまとめ関係者に配布し、ホームページで大学側への提出文書・大学側からの回答文書など膨大な資料の公開と活動内容の情報発信を行った、これら地道な活動により、本・雑誌などのメディア掲載は 50 回以上になり、保存要望書、提案書の類は 30 を上回った、日本全国はもとより、“東京女子大学建学時の総費用の九割は主としてカナダおよびアメリカの婦人の寄附によった”経緯もあるのか、米欧の大学・美術館からも保存要望書が届けられたのだ。

署名活動では、「有志の会」が 5 回提出（総計 11,635 名）。

「緑と自然に囲まれたエリアの保存を求める署名」が 3 回提出（総計 688 名）。



「旧体を愛し、慈しみ、手入れをして、使い続けるよう、保存を求める要望書および署名簿」が  
6回提出(総計667名)。

「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」(「有志の会」の名称変更)及び同窓生  
の直訴はがきが3回(総計668枚)。にも及んだのだ。

当初は、学外の建築関係者などの署名も多く学校側からは「卒業生より多いではないか」とも言  
われていたが、建築学科のない東京女子大の生徒が「旧体育館を中心とする校舎の研究」で“学生  
研究奨励費”制度の学内審査で最優秀になり全新生と教職員の前で講演を行う機会が与えられた  
(学校側も凄いと思う)。さらに学校教職員有志が「旧体育館の解体を再考する」シンポジウムを開  
催しこの問題に対峙した事は、利害関係からも特筆すべき事であり、日本では初めての事ではない  
かと言われている。

このように多くの人々の努力も空しく2007年夏東寮が、2009年夏体育館が轟音と熱気と土埃  
の中で姿を消した。

当初から最後まで学校側の解体に関する考えに変化はなく、この出来事に当初から関わった筆者  
の目から見ると、シンポジウム等に一度も出席しない(私の知る限りで)大学側が「なぜそこまで  
頑なになるのか」「どこかでボタンの掛け間違いがあったのか」と思ったものだ。

この本は(付属CD共)膨大な要望書・写真・大学側との往復書簡などの記録を、正確に主観を  
混えず収めている。

建物の保存運動、署名活動は各地であるが、その顛末を  
最後まで記録し発信している例はまれであり、知人に頼ま  
れたから署名する場面も多く、その活動を最後まで知る事  
は少ない。この様な記録を残し発信する事は、署名をお願  
いした人、保存運動をした人の義務である、それが署名簿  
の価値を高め、保存運動の対局にいる人、及び署名して頂  
いた人への責務と思う。安易な保存運動、署名活動は、そ  
の価値を低めるだけだと思う。その意味でも“素人集団”  
が多くのご苦労があった事だろうに、ここまで出来たことは素晴らしい事であり頭の下がる思いで  
ある。



この本はまた、作家・ジャーナリストの方がおられたからか、手紙・書簡の文面、記述の格調高  
い文言など、私にとりとても勉強になりました。

私たちの大学・役所などへの要望、意見などに対し全てご返事を頂きました事、この場を借り改  
めて御礼申し上げます。

すべての活動・運動は人との繋がりであり自分の意見と合わなくても「打てば響く関係」でなけ  
ればならない事を改めて知りました。

**ホンモノ**は、「残さないでよかった」ことは**一度もなく**

「残してよかった」か「残せばよかった」しかない……(永井路子)

田村公一